

第28回 MASセミナー

「素なることと多様な相」

日時:2018/7/21(土)
講演:14:00~16:00

建築の祖型は閉じられた(室内)空間の生成であった。先史時代には既に、床、壁、天井・屋根の3要素が成立し、人類の生活を支えていた。住空間・建築空間は、巨大な体躯や強い力、硬い殻や長い羽毛を持たず、道具や衣服で生き残った人類の原点である。しかし祖形は素形として残りながらも、多様な展開と相を見せる。その多様性は地理・社会・思想等に応じて、建築という生活の容器を豊かなものにします。
建築家協会大会に先駆けて、皆さまと一緒に考えましょう。(司会進行 湯本長伯)

「素の充実が多様な相をうみだす」

趣味でも仕事の延長線上のことであっても自分なりの研究というものいつの頃からか始めていたという話は誰にもありそうな話である。その自身の課題、仮説のようなことを続けていた20代の頃が僕にもあった。その研究は気がついてみると様々なことと結びついて飛躍的に発展して(多様な相)今日に至っているという感がある。今やパソコンの検索機能はこういった楽しみを触発することになりそうな気配もあるが、一方でややもすればその速効性から本人の個性を埋没させてしまうこともあるのではないかと懸念している。何かのきっかけでミステリアスなものを感じ自らの立場で研究するといったことがそのひとになれば単なる知識の集積となってしまう、オリジナルな発展は無いと思う。



素の充実とはオリジナルとしての思いがスタートにあることに注目しなくてはならないだろう。

今井 均

「越えねばならぬが、壁は高い」

Simplicity/Multiplicity の和訳は難しい。建築設計が、専門職の一方、社会や文化に繋がっていることが難しさを拡大する。また、アジア諸国と日本での事情は単純に並列出来ない。この国で建築家が自分たちの経験や想いから述べる時、文化を深く理解する人々には伝わるが、産業界や経済界はほとんど理解しない。「素なること」とは、産業構造の大転換期を迎え科学技術主導の考えによる細分化と精密化、同じく行政システムの、言語による細分指令化をもたらす硬直化が問題視され、人間本来の原点を見直そうとする方向と合致する。「多様な相」とは、そこから生まれる「人間性の多様さを受け入れる」という意味になろう。このために、建築家だけで変えられるものではないが先導役はできる。但し、自分たちの経験からの立ち位置や用語を越えなければならない。



大倉 富美雄

「祖と美」

現代アートとか現代音楽とか「現代」なにがしというものがよくわからなかった。インスタレーションなどを案内されても何が良いのかわからないので、不思議な思いに浸っているふりをしていた。そうして誤魔化していたら、来年から音楽大学で芸術と建築の歴史を教える事になってしまって逃げられなくなり、全力で付け焼き刃をつけるハメになった。先日勉強の一環で現代音楽をハープで弾くコンサートに行って少し分かった気がした。彼女は全力で美しい音を奏でていたのだ。そうか、美しい音を形式から解放したのが現代的なんだ。音こそ音楽の「祖」なのか。そうしたら現代アートの批評家の文章に「アートはもはや美を志向してすらいない」とある。



黒木 正郎

知的理解の格闘なのだそう。美に替わる祖はどこにあるのだろう。

「祖としての和/相としての光」

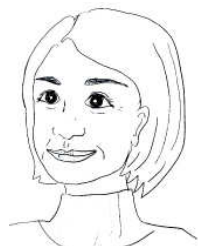
世界の人々が感動した一枚の写真がある。天皇陛下が来日したサウジアラビアの王族を宮殿に招いた時に撮られたショットだ。和風の飾り気無いシンプルな広間の中央に、花瓶に生けられた花がさり気なく飾られ、国を代表する二人の人物が対面する光景が写し出されている。清い空気感に包まれた光景は、日本人には普通に映るシーンだが、世界の国々の人々には大きな衝撃と感動を伴って配信されたと聞く。海外では、国賓級の人間を招き入れる空間は、時として金銀宝石や絵画等で煌びやかに飾られている姿が当たり前の様だ・・・しかし、和の宮殿は、豪華な飾り物は一切無いにも拘わらず、そこには、高貴さと共に威厳と気品に満ちた空間が広がる。この空間の魅力とは何だろうか・・・建築の「素なること」について考えてみようと思う。



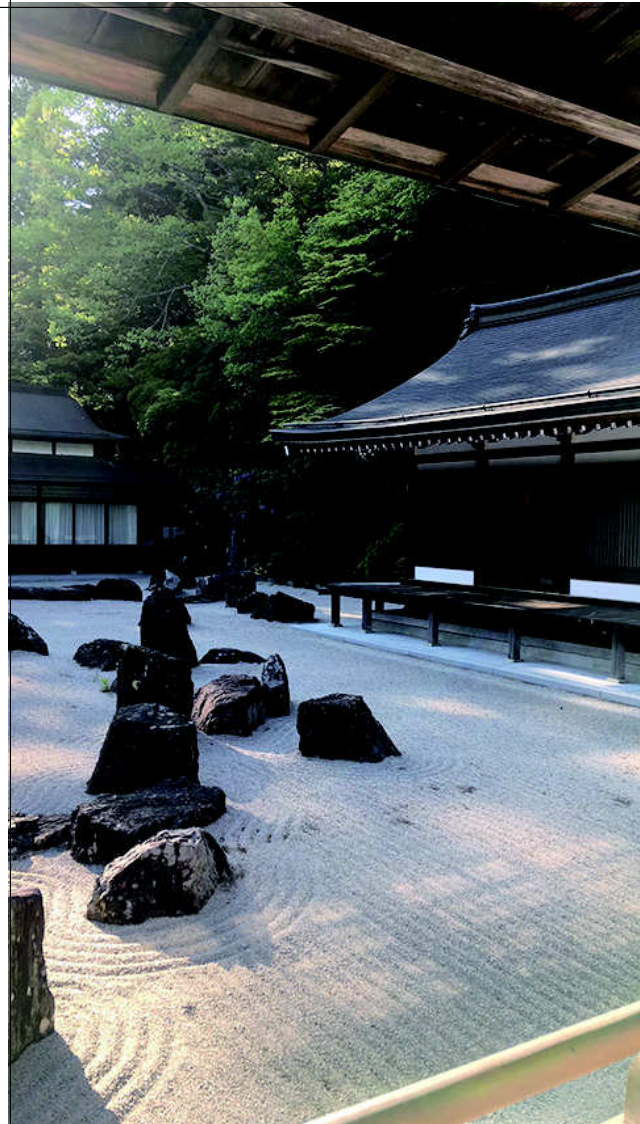
武田 有左

「素なることとは何か？」

多様という言葉は、近代から現代に至る際に、21世紀的価値を象徴し、社会の新しいイメージを構築するための大切な概念である。一方で「素」とは何だろうか？ Simple、elemental というモノの単位としての素形の意味に加え、素朴なもの=Rustic、質素=Frugal という、質の問題も含み、また建築の根源的な役割、意味、価値にも展開できそうである。
素である、ということは、建築が統合の技術である、秩序の構築こそ建築である、ということと関係がある。「建築とは何か」「建築家の仕事とは何か」、ということ今時代だからこそ、根源から考える機会としたい。



田口 知子



「祖となる屋根と多様な景色」

日本建築の素の一つは屋根である。縦穴式住居は屋根だけで人の暮らしを支えた。豪雪地帯と沖縄では屋根素材や形態は異なるが、風雪に耐え身を守る役目は同じである。災害時では、屋根があれば安心し避難する。身を守ることが建築の原点。それでは、多様な相はなんであるか。周囲との関係性が生み出す多様な情景か。森、海、山、都市など、周辺を選択肢は多様で、その多様な相と向き合いながら空間と形を導く。そこに建築の意味があり工夫があり面白さがある。



宮田 多津夫

「建築のたちあられ— “様相” を考える。」

建築の風景、佇まいをつくる“素なること”は、現代社会では、何に依るのでしょうか？ もはや、インダストリアルヴァナキュラーという工業的材料で構成される“様相”を纏っていることは否めません。“様相”ということばは、近代建築をのりこえるための概念として原広司が表現しました。経験を通じて意識によって生成され保持される情景的な様態、見え掛かり、あられ、雰囲気、たたずまいなどの空間の現象のことです。現代社会の“多様な相”は私たちの意識を通して“様相”という概念を備えた建築としてたちあられるといえるでしょう。



村上 晶子

「建築家→単に建物の設計ではなく、物語という多様な相をデザインしている」

ウィトルウィウスによると、建築家は原理を知って技術を駆使する人、アリストテレスは、諸学を探究して統合する人と言っています。いずれも単に建物を設計する人をさせているのではない。ロンドンにあるAAスクールでの建築家教育では、建物のみならず様々なものがデザインの対象です。そこでのこだわりはプロセスであり文脈です。普段の設計実務において、いつも感じるのは、出来上がった空間や場で、どんな生活が行われているのか、何が起きているのか、であり、建築家は、やはり物語という多様な相を設計している、と思います。



連 健夫